

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26381285

研究課題名（和文）道徳「教科化」を視座した授業評価の基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on moral lesson evaluation in moral subject

研究代表者

田沼 茂紀（TANUMA, SHIGEKI）

國學院大學・人間開発学部・教授

研究者番号：50363271

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：道徳科における子供の学び評価方法の確立には、その前提として子供自身の主体的かつ協同的なアクティブ・ラーニングが成立していなければならないこと、さらには子供個々の道徳的学びを認め励ましていけるような肯定的評価にはその見取りを進めるための観点が必要であること、そして個々の肯定的な道徳的学びの見取りには自己内評価や相互評価に基づく活動が必要であることなどが明確になってきた。

道徳科における学び評価の方法論については試行錯誤の段階であるが、全国の小・中学校道徳授業実践家に呼びかけて「道徳授業評価研究会」を立ち上げて継続研究したことで多様な道徳的学び評価に関する大凡の方法論は確立できた。

研究成果の概要（英文）：Learning evaluation in moral lessons requires active learning that children learn from themselves. And it is necessary for children to be able to recognize their learning. To that end, a viewpoint of learning evaluation is necessary. Furthermore, it became clear that self evaluation and mutual evaluation are necessary.

In the learning evaluation study of moral class, it was possible to establish the methodology by researching "study group on evaluation of moral lesson".

研究分野：道徳教育

キーワード：道徳科 道徳的資質・能力 道徳的学び評価 道徳学習評価の観点 道徳科指導方法 道徳教育忌避感情 道徳教育軽視傾向 道徳科の実効性

1. 研究開始当初の背景

安倍内閣の私的諮問機関として発足した教育再生実行会議が、平成 23 (2011) 年 10 月に滋賀県大津市立中学校の当時 2 年生の男子生徒がいじめを苦に自殺した事件から子供達がいじめ自殺事件が頻発したことを念頭に第 1 次提言「いじめの問題等への対応について」(2014 年 2 月) を公にしたことに端を発する。

その提言では、「子どもが命の尊さを知り、自己肯定感を高め、他者への理解や思いやり、規範意識、自主性や責任感などの人間性・社会性を育むよう、国は、道徳教育を充実する。そのため、道徳の教材を抜本的に充実するとともに、道徳の特性を踏まえた新たな枠組みにより教科化し、指導内容を充実し、効果的な指導方法を明確化する」と道徳教科化への転換を明確に示唆したのである。しかし、教科とした場合、その授業評価をどうするのかという大きな問題が学校現場に立ちはだかっていた。

2. 研究の目的

本研究では、道徳科授業評価の意義とその目的性を明らかにし、その授業評価方法論を構築するという立場から、道徳科授業で子供達に育む資質・能力、子供の道徳的学びの表出方法、子供の道徳的学びの見取り方法、という 3 視点から検討することとした。その際、道徳教育や道徳授業に対する根強い忌避感情や軽視傾向等も視野に置きながら、併せて検討することとした。

このような授業実践に即した視点からの研究を推進するため、本研究の手法として全国の小・中学校現場で熱心に教育実践に取り組んでいる教師に呼びかけて「道徳授業評価研究会」を組織し、年間複数回の研究会を開催しながら道徳科授業評価を巡る諸課題の検討と仮説に基づく授業実践検討を重ねてきた。

3. 研究の方法

(1) 忌避感情・軽視傾向についての検討

道徳科への転換移行を受け、各地で「特別の教科 道徳」の前倒し実施が検討されたり、実際に全面実施されたりする機運が一気に高まった。しかし、そんな教育界の動向とは裏腹に、何か釈然としない不安感を払拭できない。それは、道徳教育や道徳授業への根強い不信感である。その背景にあるのは、先の大戦を挟んでそれまでの修身科についての検証をすることもなく教育構造を転換させたわが国の戦後道徳教育の歪みである。とりわけ「道徳の時間」特設以降の半世紀に及ぶ不毛の歴史は、その歪みを何よりも物語っていると理解すべきであろう。

よって、これからの道徳科授業における子供個々の道徳的学びを論理的かつ現実的な妥当性(根拠)をもって評価していくためには、社会科学としての教科教育学的視点から教授・学習・評価するプロセス論を検討・構築していく必要がある。

(2) 教科教育学の視点での方法論的検討

戦前の修身科と戦後に特設された道徳の時間、さらにはこれから展開される道徳科であるが、その教授・学習・評価プロセス論のベースとなるものは教科教育学としての視点である。顧みれば納得できるところであるが、従前の道徳授業を語る時は教材論、指導方法論、教員研修・教員養成論に終始するのである。しかし、今日の学校教育における道徳教育にあって、これからの子供達に培うのは、道徳的資質・能力に根ざした道徳性の育成である。その道徳性形成過程においては、主体的・対話的で深い道徳的学びを導き出すアクティブ・ラーニング(Active Learning: 以下 AL と称す)による学びの創造とその見取り評価の視点が不可欠である。そこでは、うっかりすると指導方法の在り方のみに関心が向きがちとなる。なぜなら、修身科の時

代も、戦後道徳教育にあっても、その指導方法論や教材論はもてはやされるが、道徳科授業を刷新するためにはどうしても不可欠となる「何のために、どんな内容を、どう意味づけて学ばせるのか」という教育内容学的考察がつい欠落するのである。戦前にあっては教育勅語が、戦後にあっては学習指導要領「道徳」で指導すべき内容が示されているから、それを前提にそれに適した教材や方法をALの視点からしっかりと極めていけば道徳科授業評価ができるかに関心はその1点に向きがちである。しかし、教科教育学に立脚すれば、それは危うい片肺飛行も同然である。何が問題か？学校の教育課程として位置づけられている教科教育を考えた時、その学びを構成する内容（scope）とその系統的体系性（sequence）についての研究は絶対に外してはならない不可避なことなのである。

4. 研究成果

(1) 教科教育型道徳科授業で活性化

従前の道徳授業では、その時間で達成すべき指導目標がその時間内では到底到達し得ない「人間としてのよりよい在り方や生き方」という性格から、望ましさを志向する方向的目標設定となってきた。そのことから、各教科では当たり前な毎時間の授業を通して達成すべきことを明確に示す内容的目標設定と敢えて区別してきた経緯がある。ただ、ことさらそれを強調するあまりに同じ授業でありながら敢えて「特殊な授業」に祭り上げてしまった観があるのは否めない事実である。それが道徳科となったことで、他教科同様に「教授・学習・評価」というプロセス論的な説明が求められることになったのである。そうでないと小・中学校指導要領第3章「特別の教科 道徳」第3の4に述べられている「児童（生徒）の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある」ことを具現化で

きないのである。そこに教科教育型の道徳科授業へ移行する必然性が見出されるのである。

教科教育学的視点といっても、その前提となる道徳科教育学という学問体系そのものが定立されていない現状にあっては着手できるところから開始することが何より肝要であろう。つまり、本来は道徳科教育学を構成する道徳科教育内容学と道徳科教育方法を同時進行的に定立すべきところではあるが、比較的取り組みやすい方法学的な視点から授業改善に着手し、それぞれの実践過程で現状に即した内容学的な検討を加えていくという手続きが現実的な選択であろうと考えるものである。言うまでもなく、道徳科教育内容学の前提となるのは学習指導要領であり、そこで述べられている4視点（A=主として自分自身に関する事、B=主として人との関わりに関する事、C=主として集団や社会との関わりに関する事、D=主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する事）で構成された内容項目（小学校低学年19項目、中学年20項目、高学年および中学校22項目）を体現するための内容学的な分析を重ねることで、先にも述べた子供一人一人の個別な学び状況や学びの継続発展性による人格的成長プロセスを見取っていくための道徳科授業評価を進める観点づくりが可能となってくるのである。

もちろん、道徳科授業での目標設定は他教科のような到達目標として設定した学習内容に照らしての学び評価とはならない。あくまでも個としての人格的成長を志向した方向的目標設定となる。そのため、ともすると道徳科授業評価の見取りの観点がお題目的になりかねない危険性も孕むこととなる。そこで、道徳科で育むべき道徳的な学習能力（generic skills：日常的な学びの中で活用される汎用的スキル）に照らして、本時の道徳科授業では教授・学習プロセスのどの部分

でどのような学びを実現していこうとするのかという点を事前に明確にして授業構想すれば、その指導の裏返しとなる学び評価が可能となってくるはずである。つまり、「指導と評価の一体化」である。

道徳科で育む資質としての道徳性を基底で支える道徳的な学習能力は多種多様に考えられようが、学校内で教職員が共有し合うためにはある程度の枠組みで設定することが有効であろう。例えば、このような道徳的汎用スキル設定も考えられよう。

《道徳科で育む道徳的な学習能力例》

円滑な社会生活を送る上で必要な道徳的知識・理解力

日常生活の中での道徳的な課題発見力

道徳的な問題を実践的に解決する問題解決能力

道徳的に物事を考える思考・判断力・情報活用能力

道徳的なものの見方・感じ方・考え方の表現力

道徳的課題解決に向けてのメタ認知力

もちろん、その前提となる最も大切な資質は、「他者を理解し、尊重しながら共に学ぼうとする意欲」である点は言うまでもないことである。

(2) パッケージ型ユニットで創造する道徳課題探求型授業

道徳科授業という教授・学習プロセスを構想すると考えた時、1時間の学習展開のどの部分でどのような学びを配置し、それをどう見取っていくのかという授業づくりと授業評価の観点を事前に明確にしておけばその学び評価は比較的容易となるはずである。その際、1時間の限定された授業の中であれもこれも、あの子どもこの子ども・・・という発想は現実的ではない。むしろ、年間35時間の道徳科授業を大単元、つまりユニット

(unit)として捉え、それぞれの学期毎、節目毎に自校の道徳の実態や道徳教育重点目標に照らして重点的指導パッケージとしての小単元プログラム(パッケージ型ユニット)を年間指導計画に組み込む手法なら、個々の子供達の学びの姿は格段に把握しやすくなる。ましてや昨今の道徳教育に課せられた現代的課題の克服を想定すると、一定のテーマに基づく小単元による指導はとても効果的であろうことは容易に予測される事柄である。ここでは一定の学びのテーマに基づく小単元プログラムをパッケージ型ユニットと以下に称するが、そこで展開される学びの最大のメリットは、課題探究型道徳科授業を実現できることである。テーマに基づいて課題追求する道徳的学びの創造は、学校現場で最も忌避される「押しつけ型道徳授業から脱皮する最良の策」である。

道徳科パッケージ型ユニットでは年間35時間の道徳科授業を1つの単元として捉え、その中に学校教育目標や学校・学年の道徳の実態を踏まえて設定した重点指導テーマや現代的課題解決テーマを数時間の小単元として設定することで、子供一人一人の課題意識を大切にしたい道徳学習プロセスを実現しようという学習者目線にたった授業構想方法理論である。もちろん、これまでの1主題1時間完結型授業をすべてパッケージ型ユニットで置き換えようとするのではなく、多時間扱いのテーマ型パッケージで授業展開した方が子供の道徳的課題解決において実効性が高まると判断される際に用いることで大きな指導効果が期待できる教授・学習方法論でもあることから、一律かつ画一的に実施するといった発想はもたないのが前提である。

例えば、「いじめ」をテーマ設定するような場合、「生命の尊さ」、「公正公平・社会正義」、「友情・信頼」といった価値内容をそれぞれ単独に主題設定して指導するよりも、同一テ

ーマでのユニットとして関連づけて連続的な指導をした方が子供達の学習課題意識も明確で、より深い次元での自分事としての学びにすることができる。言うならば、パッケージ型ユニットを学期毎の重点的指導内容として年間指導計画に幾つか位置づけることで、具体的かつ実効性の伴う弾力的な道徳科カリキュラムが実現でき、その改善のためのカリキュラム・マネジメントも効果的に機能するようになるのである。パッケージ型ユニットによる道徳科授業への転換は、子供一人一人の道徳課題意識を大切にした学習プロセスを提供するという学習者中心の新たな道徳科授業創造のためのこれからの道徳科授業づくりで大いに期待される方法理論である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

田沼茂紀、実効性ある道徳科を具現化するためのアクティブ・ラーニング導入とその可能性、日本道徳教育学会機関誌『道徳と教育』第335号、査読有、2017、全210頁中 pp.83-92

田沼茂紀、道徳授業イメージに関する一考察～道徳教育忌避感情・軽視傾向の視点から～、日本道徳教育学会神奈川支部紀要『道標』第4号、査読有、2017、全50頁中 pp.6-12

〔学会発表〕(計2件)

田沼茂紀、道徳授業イメージに関する一考察～道徳教育忌避感情・軽視傾向の視点から～、日本道徳教育学会第87回大会、2016、聖徳大学

田沼茂紀、道徳科の授業評価に関する基礎的研究 評価観点設定の視点から一、日本道徳教育学会第85回大会、2015、東京学芸大学

〔図書〕(計2件)

田沼茂紀他8名、道徳授業評価ガイドブック「特別の教科 道徳」授業評価の進め方、全148頁中 pp.1-40、よしみ工産、2017

田沼茂紀他14名、中学校道徳アクティブ・ラーニングに変える7つのアプローチ、全140頁中 pp.6-25、明治図書、2017

6. 研究組織

(1)研究代表者

田沼 茂紀 (TANUMA Shigeki)

國學院大學・人間開発学部・教授

研究者番号：50363271

(2)研究協力者

三ツ木 純子 (MITSUKI Junko)

川崎市立鷺沼小学校・校長

龍神 美和 (RYUJIN Miwa)

大阪府豊能町立東ときわ台小学校・指導教諭

鎌田 賢二 (KAMADA Kenji)

京都市立桂川小学校・教頭

木下 美紀 (KINOSHITA Miki)

福岡県福津市立上西郷小学校・主幹教諭

及川 仁美 (OIKAWA Hitomi)

岩手県盛岡市立厨川中学校・教諭

岡田 多恵子 (OKADA Taeko)

茨城県稲敷市立新利根中学校・教諭

丸山 隆之 (MARUYAMA Takayuki)

新潟県三条市立第二中学校・教諭